

コミュニティーの中での文化

昔から人は都市や街といったコミュニティーを作って生活していますが、コミュニティーには自然発生的に政治、経済、文化が生まれ、これは同時にコミュニティーとして成立するために必要不可欠な三要素でもあります。

ここでは3番目に挙げた文化というものが、コミュニティーにいかに関係するかという事を論じていきたいと思えます。

仮にここに原始的な一つの村があったとして、村長を中心として村のルールなどを決める政治があり、人が生活するためには何らかの経済的な営みもあります。そして通常宗教的な理由により祭りの様な文化が起り、これらが揃ってはじめて村の体をなすものと思えます。ここで文化を祭りに例えましたが、まさにコミュニティーの中での文化とはこの祭りの部分を指すものと思えます。一見して祭りは人が生きていく上であまり必要のないもののように捉らわれがちですが、祭りは村の伝統を育み、村人たちの心のより所となり、人々の村への帰属意識を高め、「この村が好きだ」と人々が思い活力を生む場でもあります。村の政治や経済が祭りの開催に影響を与えるように、こうした意識は村の政治や経済に大きな影響をもたらすと思えます。この三要素はお互いに影響しあって三位一体をなしているのです。

現代の都市と言えども、仮にこの三つの要素のうちいずれかが欠けると例えばベッドタウンのような単なる人口密集地になります。もし個人的に芸術やスポーツといった文化に関心がないとしても、だれでも都市や国などの社会に参加し恩恵を受けて生活しているわけですから、その重要性は認識しなくてはなりません。

クラシック音楽の優位性と普遍性

さて、祭りを例にとって文化の位置づけを説明しましたが、実際は年に一度の祭りですぐ済むような単純なものではありません。一口に文化と言っても人々の関心は実に多様ですし、何によって満たされるかもそれぞれです。ここからは音楽文化の中でも中心的な役割を果たしているクラシック音楽を中心に話しを進めていきたいと思えますが、あるジャンルの文化が、この場合音楽とします。それが高度に洗練されると芸術になります。どの時点から芸術と呼べるかは決まっていますが、より多くの人々が芸術的価値を認め常に評価が安定しているジャンルはそう多くはないと思えます。何故なら高度に洗練され常に評価されるためには通常百年単位の長い時間が必要だからです。そのプロセスを経たモーツァルトやベートーヴェンに代表されるクラシック音楽芸術は音楽文化の頂点にあるものと思えます。

日本ではクラシック音楽を単なるゲルマン民族を中心とする欧州の民族音楽と位置づけ、異文化として捉え他の民族音楽と同列に扱おうとする人がいますが、それは間違っています。西洋音楽という言い方さえも今となってはそぐわないと思えます。私たちが普段耳にしている歌謡曲などのポピュラー音楽や演歌までも、全てクラシック音楽のルールに従って書かれています。敢えて伝統を守っている例えば邦楽のような民族音楽を別にすると世界中の音楽がこのクラシック音楽の強い影響下にあります。もしクラシック音楽を西洋の異文化として捉えるなら、私たちが住んでいる家や建物も、ごく普通の家庭料理も普段着ている服も全て

異文化と構えて言わなくてはなりません。

更に言うなら、ベートーヴェンを聴いて ”エキゾチック ”と感じる人はいないと思います。これはクラシック音楽が特定の地域の民族音楽ではなくグローバルな音楽になっている証拠で、国際音楽祭などでよく「音楽は世界共通の言語云々・・・」といった事を言われる由縁でもあります。

こうして考えていくと、日本におけるクラシック音楽は単に一部の趣味人の欲求に供するためだけに存在するものではありません。自分たちの国の伝統音楽を大切に守ることはもちろん重要ですが、文化の中核のひとつであり、いまや世界共通音楽となったクラシック音楽を国内で発展させていくことはとても重要です。

文化予算について

国や自治体や民間が文化に費やしている費用を算出し、国家間の文化レベルを正確に比較するという事は実はとても難しいことです。この辺の説明は私がする必要はないと思いますが、フランスは国家予算の1%を文化予算にあてて文化立国として名高いですが、アメリカは政府が文化に関するのは最小限ですが、民間の寄付によってGDPの2%以上が文化に使われています。その中間にドイツやイギリスなどの国々があり、いずれもGDPの1%以上が文化に使われています。

一方日本は数年前に文化庁がアーツプラン21を実施し、昨年芸術文化振興基本法が制定されましたが、国家予算の0.1%という文化予算に大きな変化があったわけではなく、文化活動に対する寄付が増えたわけでもありません。クラシック音楽界を例に出すとオーケストラに対する国や自治体の保護のあり方や、ホールの運営に行政がどこまで関与するか等、政策論、財政論ともに未熟で方向性すら定まっていません。そもそも文化が国や地域を発展させるために必要不可欠な要素であるとの認識が不足していると言わざるをえません。

実際に芸術分野で仕事をしていて変化を肌で感じることはありません。むしろ景気の影響で文化が衰退していると感じる事の方がずっと多いです。

こうした足踏み状態は社会に文化の重要性を認識している人々の層が薄いからで、「文化は大切だ」と仮に行政や一部の人が唱えても、掛け声だけだったり、本心から言ってもなかなか社会的なコンセンサスを得られないことに問題があります。芸術文化振興基本法はそれ自体は期待に値するもので、運用によっては大きな可能性を孕んでいるので無駄にしたいくはないものです。

「不景気だから文化にまで手が回らないよ」というのではなく「不景気だから文化を充実させて活気を取り戻そう」と考える人が増える事が社会を発展させる上で大切です。

オーケストラを取り巻く問題

クラシック音楽のグローバル化という話しがでましたが、現在先進国のほとんどの大きな都市にはプロのオーケストラがあります。そうした国々や区々のオーケストラは演奏にそれぞれの民族色や地域性が出ていて面白いのですが、そうした見方のほかにもオーケストラの規模や水準から、その街の文化レベルを押し量る事ができます。オーケストラを維持するためには多額の費用が必要です。立派なオーケストラが存在するという事は、それを許している社会が背後にあることとなります。つまり文化の重要性を認識している階層がそれだけ厚いという事です。

日本音楽家ユニオンに「オーケストラは街の文化のバロメーター」という標語がありますが、そういう事を意味しています。

報道で既にご存じと思いますが、わが札幌は昨年から今年にかけて破綻・解散問題で大揺れに揺れました。札幌の年間総予算は約10億円で、バブル崩壊後の10年間は毎年5000万円ほどの赤字予算を組み、ついにその累積赤字が5億円になりました。札幌財団の理事会は道内有力企業の役員などで構成されていますが、いわば名誉職的なもので実体の薄いものでした。こうした経営者不在の状態です。団の赤字や、問題のある事務局体勢など多くの課題が放置されてきた構図があります。

今年に入り、楽員の人件費削減や事務局体勢の刷新、理事の交代などで緊急の課題は乗り切る事ができましたが、本当の立て直し作業はまさにこれからです。営業面や企画面の強化、理事、事務局員、楽員の意識改革が喫緊の課題です。

しかし、経営努力などで札幌が変わり当面の問題が解決したとしてもオーケストラを取り巻く社会の状況に変化がなければ、実は根本的な問題が解決したとはいえません。札幌の年間総事業費は約10億と言いましたが、その内公的助成は国からの約9000万円、道と市からはそれぞれ1億7200万円(2000年にそれぞれ800万円減額されました)で総事業費に占める割合は約40%です。札幌楽員の平均年収は約560万円です。来年度からは削減により510万円になる予定です。

これらの金額が何を意味するのかというと、オーケストラは事業収入だけでは成り立たない存在だということです。楽員の給与を下げるのには限界があります。生活という面でもそうですし、優秀な奏者の確保や個人所有である高額な楽器の購入、自宅での練習の必要から住居も選ばなくてはなりません。演奏会のチケットの値段を上げるのにも限界があります。さらに、公演回数を増やすのにも限界があります。現在札幌は年間約100回の演奏会がありますが、年間稼働日数は約260日でオーケストラとしては全国でも最多のグループに入ります。

現在日本の多くのオーケストラが札幌と同じような問題に直面しており、存続の危機にさらされています。

忘れられがちですが、文化とはホール建設などのハード面よりも、こうしたソフト面にお金がかかります。しかもソフト面においては一回お金を出せばお終いというものではなく、継続的に同じかそれ以上の金額を出しつづければなりません。だからこそオーケストラは国や自治体の文化レベルのバロメーターになるのです。

仮に札幌のホールに頻繁に外国からオーケストラ招聘して演奏させても、それはそれで楽

しいことですし素晴らしいのですが、外来オーケストラが札幌のホールで演奏したからといって札幌ならではの演奏をするわけではありません。それが札幌の文化と評価される事もあります。札幌の文化と呼べるものは札幌の人たちの不断の努力で育てていくしかないのです。

クラシック音楽を聴く聴衆の層について

最近アーツ・マーケティングという分野がクラシック音楽業界で注目されています。日本でのアーツ・マーケティングの第一人者である社会学者の山田真一氏が1月17日の朝日新聞で『アーツ・マーケティングはコンサートの宣伝やチケットの販売戦略とは異なる。コンサートを望む人たちにいかに的確な音楽を提供するか、またどの程度払ってもらおうかを考えることである』と書いています。

オーケストラの経営にあたって、こうした手法をとることは当たり前の事のようにも思われるかもしれませんが、アメリカでもこの手法が取り入れられたのは80年代に入ってからで、日本では現在でもプログラミングや販売戦略といったものは事務局員の勘にのみ頼っているのが現状です。この話しはオーケストラで働くものにとって興味が尽きないところではありますが、今回のテーマとはそぐわないので次回に譲りたいと思います。

この話しを持ち出したのは、アーツ・マーケティングを行う必要上、アンケート等により顧客ニーズやどういった聴衆がコンサートに足を運んでいるかという調査と、セグメンテーションによる聴衆の分類と階層化が徹底的になされていることです。

札幌で考えると、札幌の定期演奏会に集まる聴衆、名曲を集めた演奏会に集まる聴衆、無料の演奏会に集まる聴衆、外来のオーケストラに集まる聴衆などコンサートによって聴衆の顔ぶれや雰囲気があるで違ってくるのに驚かされることがよくあります。これは聴衆の分類を考える上でヒントになります。

本来クラシック音楽の聴衆自体、ある程度以上知的欲求の強い層で、裕福とは言わないまでも経済的に中流以上の層が中心になるとは思いますが、頻りに演奏会に通い文化にも強い関心を持っている層となると、その中でも更に限られたごく少数の人々になるとは思います。しかしセグメンテーション風に考えると、実はこのごく少数のグループが全体の流行を決めている訳でもあります。このグループが全体に及ぼす影響を充分認識し、このグループの人数を増やしていかなくてはなりません。

大学における芸術教育の意義

大学は言うまでもなくやがて社会でイニシアチブをとる人々を育成するための機関です。大学での文化教育の一環として芸術授業を充実させ、この階層にクラシック音楽の芸術性と文化の重要性を十分に理解した人間を増やしていく事が必要です。

社会の中核にいる知識人が政治、経済、文化の三位一体を認識し、文化芸術の社会的意義を理解すれば、「わたしはクラシック音楽の事は何も知りません」と開き直る事はできない

はずです。また先述した芸術市場の頂点の階層を健全に育てるためにも大学の役割はとて大きいのです。それとクラシック音楽業界ではマネジメント分野での人材が圧倒的に不足しており、それが業界全体の弱体化を加速させています。大学にはこうした人材の育成も期待したいところです。

「文化は大切」という言葉がスローガンだけで終わってしまわない社会を作るために大学の責任は重大です。

実際の授業にあたり学生が文化芸術の重要性を認識するには、芸術とはどんなものかを知ることが前提になります。クラシック音楽で言えば、必ずしも演奏技術の習得を目指す必要はありませんし、楽典の知識も不可欠というわけではありません。まず最低限と思われる作曲家と楽曲と僅かばかりの音楽用語、そして演奏会場での鑑賞マナーを知識として身につければよいと思います。これは同時に大学卒業者が当然持っていてよい教養と思われま

す。しかしここで終わってしまっはまさに片手落ちです。日本の音楽教育で一番欠落していると思われる音楽の鑑賞姿勢を学ばなくてはなりません。なによりも芸術の素晴らしいところは心で感じ感動するという事にあり、演奏会で会場が一体となる体験をお持ちの方には説明の必要はないと思いますが、作曲家と演奏家、そして聴衆の一体感で得られる感動こそが音楽芸術の結論と言っても過言ではありません。身につける知識もこの結論を得るための手段と心得る必要があります。生演奏に親しむなどしてこうした体験を積むことが大切だと思います。